

政治・メディア・政治漫画（8・完）

茨木正治

I 問題の所在

II 政治シンボル論と政治漫画

(1) 政治シンボル論の系譜

1. 「シカゴ学派」——メリアムとラスウエル——

2. M・エーデルマン——政治儀礼と政治言語——

3. シンボル操作研究の流れ

4. 最近の政治シンボル研究

5. 日本の政治シンボル研究

(2) 隣接諸科学の政治シンボル研究

III マス・コミュニケーション論と政治漫画

(1) 「効果研究」の系譜

(2) 「現実の再構成」論と政治漫画

(3) 批判学派の理論と政治漫画

IV 結論と展望

(1) 結論

(2) 課題と展望——政治漫画の未来——

（以上 本号）

（以上 第三卷第二号）
（以上 第四卷第三号）
（以上 第四卷第四号）
（以上 第五卷第一号）
（以上 第五卷第四号）
（以上 第六卷第三号）
（以上 第七卷第四号）

IV 結論と展望

(1) 結論

本論文(①から⑧まで全体をさす)では、「政治漫画」と諸科学・領域との関係を、対象(政治)と掲載媒体(新聞メディア)に限定して考察した。したがって、政治学、マス・コミュニケーション論、およびそれらの隣接諸領域について、「政治漫画」に関連する領域と「政治漫画」との関連を論じ、「政治漫画」の理論的・方法論的背景を探ろうとした。

まず、政治学との関連を以下のような考えによって論述した。政治情報の凝集と、それに対する一定の感情の喚起を生じさせる「政治漫画」にはシンボルとしての機能があると見ることができる。ここにおいて、政治学におけるシンボル研究を「政治シンボル論」とみなすと、この研究は、「シカゴ学派」を端緒として、M・エーデルマンおよび現在の政治コミュニケーション研究に脈々と流れる研究群に相応する。この「政治シンボル論」においては、エーデルマンの「政治儀礼」と「政治言語」の概念が特に「政治漫画」との接点を多く持つ。すなわち、「政治儀礼」が「政治漫画」のシンボルを形成する外在的な要素の考察に、「政治言語」が「政治漫画」の内容を伝達するための(それによって読者を政治漫画の世界に引きずり込む説得をはかるための)修辞技術と技術相互間のルール(コミュニケーション・コード)の考察にそれぞれ関与することが明らかになった。

「政治シンボル論」の背景となる隣接諸科学のシンボル論として、社会学・人類学・社会心理学におけるシンボル研究(およびシンボルを扱った研究)をあげ、「政治漫画」との関連を考察した。その中では特に、社会学における「ドラマ論」と「政治漫画」との関係をとりあげ、分析手段としての状況の時系列的叙述のみならず、「政治漫画」

自体を政治現象全体の流れを切り取って抽出されたものであることから、「政治漫画」それ自体の分析にも適用可能であることを示そうとした。すなわち、K・バークの「ドラマティズム」を日本語文法の諸概念と組み合わせ、「政治漫画」の内容を把握しようとした従来の研究に、線、画面、コマ、フキダシなどの「形態的」要素を加味して、一枚の「政治漫画」の中に見られる多様な「流れ」の把握をはかることが可能性として示唆された。

マス・コミュニケーション論と「政治漫画」との関連では、「効果研究」、「現実構成論」、「批判学派」の理論の三つの領域との接点が見出された。

「効果研究」においては、「議題設定機能」と「利用と満足の研究」に「政治漫画」研究を位置付けることができた。「議題設定機能」においては、争点の顕出性の程度が受け手の認知や態度に影響するというこの機能の本質と、「政治漫画」における「解説」と「評論」の機能がそれぞれ対応することが、ことに画像情報の属性と相俟って明らかになった。他の文字情報（記事・論説など）との関係を探ることによって「（文字では）語られなかった部分」をどのように「語っている」のかを探ることの必要が示唆された。このことは、いわゆる「属性型議題設定」を考える上でも「政治漫画」がその素材を提供することになり翻って「政治漫画」の内容の構造化を明らかにすることにもなりうることを示された。また、加えて、「地位付与」機能が、「政治漫画」の戯画としての働きと照応し、「認知」から「態度」への効果の進展を促すことが予期された。

「利用と満足研究」においては、「政治漫画」の読者の要求の構造を把握する従来の研究のほかにも、「欲求不充足」の問題を「政治漫画」の面白くなさから突き止めていくことや、「組織化された作品」としての「政治漫画」（新聞社や社会全体の価値の反映を示す場合もある）によってみたされる欲求とは「誰」のものなのか、当該集団にとってこの増し区内欲求はそもそも画像に登場しないのではないかを問うことから、批判としての「政治漫画」そのものの働きへの問いにつながるが見出された。

「現実構成論」においては、「シンボリックな現実」から「主観的世界」を構成するための要素として「政治漫画」をとらえ、いわゆる「送り手」の意識や構造を把握する「送り手」研究への道を開くことが示唆された。その際、漫画家と編集者、新聞社との関係が、情報ソース（政治家、官僚、政治的圧力団体、政治諸制度、読者以外の人々など）との関連をみるための指標となることにも言及できた。また、「送り手」内での「社会化」の問題が示唆されたが、「政治漫画」の内容の変化をどのように追うのかという点で課題となった。

「批判学派」の理論と「政治漫画」との関連は、社会的文脈を「政治漫画」からどのように引き出すかに関わっている。上述したように、新聞内の文字情報のみならず、「政治漫画内的情報」（キャプション、フクダシの言葉、状況説明の言葉、など）との関係から、内包される「支配イデオロギー」の程度を測ることになると推定されるがそれはかなり困難である。むしろ、「政治漫画」と同程度の価値判断を含んだ投書・コラムから推測するほうがこうした「イデオロギー」の内包状況が明らかになるのではないかと思われる。ここから、投書、「政治漫画」が表現ないし表出する「市民」「国民」「人々」との内容、「無誤謬性」について考察する手掛かりが得られたのではないかと推測した。

(2) 課題と展望 —— 政治漫画の未来 ——

1 「政治漫画」の課題

「漫画」は「萬画」に通じ「融通無碍が特色」（夏目房之介、2000年日本漫画学会シンポジウム講演）である以上、様々な分野との連関が研究対象として、また理論的背景として考えられる。ここでは、「政治漫画」の「政治」と「漫画」の双方に限定し対象領域の可能性を示唆し、理論研究ではマス・コミュニケーション論を中心に課題を提示する。

研究対象としての「政治漫画」が有する課題としては以下の三点がある。

第一に、国際比較の問題である。欧米の「政治漫画」だけでなく、その他の地域、たとえばアジア諸国の「政治漫画」にも長い歴史があり、日本の「漫画」世界との交流がなされている。資料の収集、分析において依然として問題はあり、「政治漫画」の形態や内容にも文化的差異が見られることが予想されるが、そうした困難を考慮しても、「政治漫画」の国際比較は意味のあることと考える。その理由として、国際情勢の理解・判断における情報の「質」ないし情報理解の「質」（リテラシー）の向上は急務であり、西欧特に米国一辺倒の情報接触状況にある日本の一個人ないし「市民」として、どのような情報を選択していくかが国際情勢の把握に不可欠とみなされるからである。国際関係の情報に付着する「過剰な」「情緒」や「リアリズム」が「情報操作」の遠因となっていることは否定しがたい。こうした情報環境の偏在を相対化し、多様な視点の確立を目指すためにも情報源の多様化、メディア様式の多様化が望まれ、その手掛かりとして「国際比較」が必要となるのである。しかしながら、前述したように情報の収集と分析に未だ問題点を抱えており、課題の対象でもある。

第二に、政策科学と「政治漫画」の関連の考察である。政策過程におけるメディアの役割については、十分な検討をされているとはいえない。個別の争点・議題に関するメディアの考察はされているが、総合的なものは見られていない。メディア組織自体が政策構築の大きな役目をはたすこともありうると思えば、いわゆる「導管モデル」（メディアは政策主体の情報を伝達し、それ自体が情報を構築することがないとする見解）では限界がある。「アジェンダ構築機能」仮説（コブ、エルダー）などの精緻化ががかりとなろう。その際「政治漫画」はいかなる役割を果たすのだろうか。これは、新聞メディアが果たす機能とも関わってくるであろう。政策の設定、立案、決定、実施、評価のいずれの場合にもメディアが関わるためには、情報の政策側の公開と透明化が求められるが、とくに政策設定、立案におけるメディア自身の「アジェンダ構築」に視覚情報として「政治漫画」が関与することが可能

であると思われる。そのためには、個別政策に関する「政治漫画」の「内容」の分析に、より精緻な下位争点の抽出とその実証的裏付けの確保が求められる。

第三には、「政治漫画」の「漫」画の分析が行われる必要がある。本稿を含めて、「政治漫画」の「笑い」の部分の考察は、心理学の知見、教育学の知見があるにせよ、それらはあくまで「道具（手段）」としての「政治漫画」の笑いの研究であつた。さらに、「政治漫画」における、シンボルの情動喚起や意図の収斂といった諸機能も「笑い」を媒介にしてきた。こうした点からみると、「政治漫画」に内在する「笑い」の考察はきわめて不十分であつたといわざるを得ない。また、素材となる政治現象においても、笑いの持つ政治性が経験的に（感覚的）には語られているが、体系的なものはない。後述するように、笑いとは政治との関係を顧みることによつて「政治漫画」に内在する笑いの探求につなげたい。

理論的背景としての研究における課題は次のようにまとめられる。

- ① 視覚メディア研究
- ② 批判学派の理論の展開…ジェンダー研究との関連
- ③ 経験学派の拡張…効果研究と現実の構成論
- ④ 政治コミュニケーション論
- ⑤ 日常の権力と「笑い」

（②から④までは、それ以前にすでに言及した。⑤は後に述べる。したがって、ここでは①について言及する。）

①は、ゴンブリッチに代表されるような、ヴァールブルク（ウォーバーグ）学派のもつ、視覚形象に外形的な意味を見出す「イコノグラフィ」（図像学）から歴史社会史的方法による象徴体系全体を把握する「イコノロジー」（図像解釈学）への転換をてがかりにして、「政治漫画」の象徴体系的把握の可能性を探ることを中心的課題とする。

その際に、美術史、漫画史の流れを、複製メディア以降のものをふまえつつ考察を進めることになるが、これはかなり大がかりな研究となろう。加えて、画像メディアのひとつとして、新聞に掲載されている「写真」の分析から、「政治漫画」の分析と理論化の契機を得ることもできるだろう。

たとえば、視覚メディア研究者のコトル(Cottle)によれば、情報伝達に内在する意味の確定と意味の多様性との「両義性」を視覚メディアの収容な特徴であると位置付け、過去の「画像」研究を、「現実歪曲作用」、「画像のシンボル性」、「記号論的接近」、「認識論的接近」に分けている(Cottle, 1998)。社会の出来事ありのままに表す「現実の鏡」説に疑問を呈する「現実歪曲作用」説は、「政治漫画」の表現技術としてのデフォルメ、戯画(カリカチュア)ー、絵画技法一般に言及した研究に対応する。さらに、「政治漫画」の製作過程ないし、漫画家と編集者、読者との関係から構成される「作品」(あるいは「商品」)の認識の研究に関連させることができる。しかし、「現実歪曲」の概念の背景に、「あるべき現実≡真実」というものがあるとすれば、それはあくまでも「現実の鏡」説の延長上しかこの「歪曲」が因縁を位置付けることは出来ないという限界についても留意すべきである。

「画像のシンボル性」については、特定の画像から一定の出来事や概念を象徴化する視覚イメージの抽出を目的とした研究群である。「記号論的接近」と組み合わせ、個別シンボルから記号体系全体の考察に敷衍することができる、前述した「イコノロジー」への道が開ける。「現実の歪曲」説も、「あるべき現実」が「多面的多様な相を持つ現実」と読み替えることができれば、これら二つの研究群に含まれうる。「政治漫画」においては、特定のテーマに関する「政治漫画」の分析から、包括的、抽象的なテーマへの拡張を解釈上おこなうことになる。いいかえれば、争点の属性から争点を導き出すことになる。こうした「抽象化」を行う理論的定式はまだない。しかしながら、政策研究において時系列的に「対米外交政策」の変遷を追うことが出来るように、「政治漫画」においても特定の争点をかなり長期にわたって時系列的に追求することから考察が可能になると思われる。

「認識論的接近」とは、受け手の認知や知覚に画像が何らかの影響を及ぼすとみなす研究である。特に、情報の権威や正当性を保証するための画像の役割を焦点にし、「信用するに足りる現実」を当該情報が表していることを裏付けるものとして画像をみなすものである。共有される現実がいかに構成されるかを探ろうとする研究であり、その意味で送り手側では、作者（漫画家）と編集者ないし新聞社全体の意向とのせめぎ合いをみることになる。他方、受け手側では、統合体としての「読者」がどのように「政治漫画」を認知し、それが提示する現実を真実としてどの程度認知したかを明らかにしなくてはならない。こうしたことが直接無媒介に「実証」できるかどうか、そしてその方法論的枠組みをどこに求めるべきかという問いの前に、表象された内容が、デフォルメされ、戯画化されていることを読者がどのくらい認識していることから始めなくてはならない。こうなると、「政治漫画」自体を切り取って分析対象とすることはできない。ここに「統合体」としての「新聞」メディアの理解と把握が求められることになる。

2 政治批判の課題——「笑い」と政治——

「政治漫画」の「漫」画の部分を考察するにあたり、まず、政治についての「笑い」の持つ意味を振り返ることにする。「笑い」が政治と対極にあるというイメージから、政治的技術の一環としてとりあげられることはあったにせよ、従来政治学においてはまともに扱われてこなかった。政治的技術としての「笑い」の位置付けとしていわゆる「体制の安全弁」や「体制批判」としての「笑い」の機能を考察するものがみられる。その中の一つとして神島二郎の研究（神島、一九八二）を紹介し、検討をすることによって「笑い」と政治との関連を考える。

政治批判の諸形式として、彼は以下の五つの行動ないし言説をあげている。

①「毀す（こわす）」

② 「逃げる」

③ 「笑い」

④ 「黙る」

⑤ 「参政権より諸(いも)を」「デモクラシーはでも暮らし(暗し)」

①は、器物破損による「腹癒せ」行為である。こうした代償行動によって批判的姿勢を表沙汰にし、政治的行為者とその服従者(「破壊行為者」)の間に相互の反省を促すものである。幕末期の「一揆」や「打ちこわし」、諫言の代償としての「自死」がそれにあたる。こうした「破壊(的)行動」は、政治的関係にかなりの個人的性質が内包されている場合に効果がある。すなわち、「破壊」行動の象徴的意味を「共有」できる読み取りが相互に成立している必要がある。そうでないと、相手側の迅速な意味付けによって「破壊行動」が単なる「秩序の紊乱」に還元されるおそれがある。ここに、こうした政治的行為を「解釈」し、「伝達」するものの重要性がある。

②は、当該政治的支配関係から、逃れ姿を隠す「隠遁」「亡命」がそれに該当する。重税に窮した農民が田畑を捨てて一斉に逃げる、江戸期の「逃散」もそれである。政治的関係の規模によっては「逃げる」こともかなわない場合があり、また、排除の結果「逃げ出す」こととの区別がつきにくいことがある。

④合議形態が「全会一致」の規則を採っている場合に有効である。「多数決原理」の乱用によって抵抗とするには、「どのように黙るか」が問われることになった。「少数意見の尊重」原理に基づくとしても、その前提には「発話」があるとすれば「沈黙」を抵抗ないし意思表示とすることは難しい。しかし、非言語コミュニケーションにまで政治的行為を拡張することが出来れば、「沈黙」のもつ意味が再浮上する。「政治漫画」の可能性がここにある。小さい文字を使わずに、特定の政治的争点に対して異を唱えることを伝える作品は「政治漫画」の中において可能となりうるからである。あるいは、「沈黙」までいかずとも、「寡黙」になることによって、饒舌な政治言語の働きを

相対化し、言語そのものの効果を尖鋭にさせることができよう(すでに、詩歌の世界が実践している)。ところで、「沈黙」にも「沈黙させられる」ことによって一見同じ状態が生ずることがある。これは、明らかに似て非なるものであり、支配状態の一環としてとらえられる。いわゆる、「排除」コミュニケーションとしての「沈黙」は、議論の舞台に登場させてもらえない「第二次的権力」を通じて、被支配側が自己規制をしまい、自ら俎上にすらあげない「第三次的権力」状況に移行する危険をはらむ。支配形態の内面化の結果、「沈黙」が生じても抵抗にはなりえない。

⑤は一種の「脱政治化」(apolitical)の問題である。もともと、ここにおける「脱」とは、既存の権力政治からの逸脱であり、既存の政治的価値よりも優先順位において「日常生活」の安定を希求するための抵抗である。「脱政治化」を「無知蒙昧」とみなすのは、近代主義の所産である西洋政治学の「進歩主義」にもとづくものであり、支配に対しての抵抗は知識・論理によって行うべきであるという「真面目主義」(「イデオロギー偏重」)であるとして、神島は述べ、こうした「真面目主義」に対抗する形で戦後まもなく登場したのが⑤であるとする。しかしながら、こうした「生活者の政治」は、市民運動の展開によって一応の発展はみただけでも、生活の視点から共有すべき政治的態度や信念を形成させる枠組みを立てるには至っていない。そのため、高度経済成長による人々の生活水準の全体的な底上げと、人々の関心の多様化にともなって、「生活者の政治」は「自分の藩を守る」ことに主眼を置く「生活保守主義」に転化した。これによって、経済成長の終焉とともに、「生活至上主義」ともいうべき政策への服従がみられるようになったのは、昨今における内閣支持率の高さを見れば明らかである。とはいえ、神島の議論で注目すべきは、支配―抵抗、対立―闘争による政治批判の枠を超えた政治批判としてこの「生活者の政治」をみていることにある。すなわち、旧来の価値やシステムを「脱構築」することの意味を、この批判様式に見出していたことに他ならない。いわば多元主義やポスト・モダンの姿勢を「生活者の政治」に求めていたのである。

「政治漫画」は、「政治常識」のほかに「文化的示唆」の修辞技法によって、政治情報を日常のできごとや人物に置き換えて表現する。この点で、「生活者の視点」を従来から持っていたといえる。国政レベルの政治を日常生活に置き換えて伝えることに、上述した「真面目さ」が脱色されて「不真面目さ」が登場する。ここに、「脱構築」の契機があるといえるかもしれない。しかし、「文化的示唆」の技法は当然のことながら、読者のおかれている環境なし行動様式が変化すればそれに応じて変わる。「生活者の政治」観が「生活保守主義」に転じているならば、古きよき「生活者」のイメージでは「政治漫画」の内容を伝達することは難しくなる。加えて、政治情報そのものが様々な形で「情報公開」され（政党の党首や政治家がこぞってテレビに登場したり、政治家のイメージをテレビによって植え付ける「テレ・ポリティックス」などはその良い例である）、旧来から言われている「政治＝技術」のイメージが日常化された形で伝わる時代においては、「政治漫画」による「政治の日常化」による「日常の政治学」の手法では、対抗することが困難といわざるを得ない。

③の「笑い」は、軽口、政治風刺、小話、狂歌、落書、替え歌などの形をとり、名譽や恥に訴えるものであるとし、内部統合を目的とした「笑い」であり、それによつて規律や倫理を徹底させるとしている。①で指摘したのと同様、価値基準を共有する集団内で行われることに力点がある。そのため、「外集団」に対する抵抗にはなりえず、大衆化した現代社会においては、こうした「笑い」は、他の要素（政治的・経済的、社会的権力関係）を背後に持った「排斥」「峻別」の「笑い」となりうる。また、「内集団」における統合においても、権力関係で生ずる被支配者への軋轢は存在するから、その軋轢を転化させる「安全弁」機能を「笑い」は併せ持っていたとみられる。その「安全弁」が「集団間」に作用するとき、集団ごとの「抑圧の移譲」が行われる。ここに嘲りへの転化をみることができる。

体制批判としての「笑い」だけが、必ずしも政治と「笑い」の関係を一義的には規定せず、そうした「笑い」自

身が変容することは、次の坂本と阿部のそれぞれの研究から刺激された考察によっても明らかになる。

坂本孝治郎は、「行幸研究」のなかで、象徴的リーダーとフォロワーとの関係を考える概念として「コートシップ」をとりあげ、「行幸」イベントにおける各集団間の「コートシップ」の関係構図を示した（坂本、一九八八年 四六頁―五四頁）。そこにおいて、イベントに反対の意思表示をする集団は、メディアによってイベントに包摂されるか、「厄介者」のレッテルを貼られて排除されるかいずれかの結末を迎える。これを「政治漫画」ないし漫画一般における政治批判の戯画化に援用すれば、商業主義や編集―作者の合作としての「漫画作品」という現実を考慮すると、自らを笑って政治問題を相対化するだけにはとどまらなくなる。すなわち、戯画や嘲笑が風刺の枠を超えると、政治批判そのものが戯画の対象になる。自らの批判に脆弱な批判勢力は、自己省察にとどまらず、自己否定を引き出してしまひ潰れてしまう。また、批判や戯画化の矛先を、強者や多数派から弱者・少数者に向けた「政治漫画」や漫画も、漫画としての特徴をこうした戯画化によって食い潰れてしまう。いずれの場合にも、政治批判としての役割は保てず、政治行為者にとっては都合の良いことになる。「戯画化」機能の衰退は、描き手集団の、対象への隷属という現象を生み出す^⑩。

阿部潔は、権力のポスト・モダンを論ずるときに、批判の様式も変化する必要があることを指摘している（阿部、一九九一）。彼はマス・メディアの「批判学派」の中の「修正主義」の価値理念を「権力闘争としての文化多元性」におき、その限界を示した。効率と合理性を追求する機能主義を批判して、象徴表現などの多様性・差異性を重視する「ポスト・モダン」状況下では、権力それ自体が多様性・差異性を有しており、「修正主義」の批判や抵抗は意味を失って、逆に現状の肯定に陥ると危惧した。「笑い」による権力批判が「ポスト・モダン」的批判を有するということは、支配や権力が一元的であるという前提がある。ところが現代の権力はいわば「ソフトな管理」をおこなっており、被支配側に自由な選択肢や、差異、多様性を見たところ提示している。こうした多様性は、豊かさがも

たらしただけであり、選択肢は無限に存在するわけではないにもかかわらず、これらを所与のものとして扱いがちである。また、権力の多元性は進み、内閣総理大臣は権力の主体のひとつに過ぎない。「首のないファシズム」（前田、一九七八）の前段階ともいえるこうした状況では、体制批判といった「笑い」だけでは、抵抗にはならない。実はこのような認識は、「政治漫画」批判として一九五〇年代に、既にH・L・スミスによって直感的ではあったが示唆されていた（H. Ladd Smith, 1954）。だが、それに応じる研究はいまだになされていない。

3 「政治漫画」の展望——「政治漫画」に未来はあるか？——

「政治漫画」の課題は、マス・メディアとしての問題と、政治批判としての問題の二つに大別できる。そして、マス・メディアとしての問題には、さらに以下の二つの点に分けられる。

第一に、マス・メディアとしての「政治漫画」を見直す必要がある。新聞漫画として「政治漫画」にはどのような要素が働いているのかを再検討すべきである。ハリソンが図示したような（Harrison, 1981）、「政治漫画」の作品自体を構成するための構造（「漫画家」「編集者」「原作者」「スポンサー」（広告主）、様々な媒体、「読者」）だけでなく、メディアとしての「政治漫画」をとらえるより広域な構造を提示することが求められる。それは、掲載されている「新聞」メディアの他の要素との関連である。この点は、メドハストたちがレトリックのひとつとして提示していた（「配置」の問題）が、記事、論説（社説、コラム、投書——読者の意見の反映ととらえるか、「新聞」の意向の形を変えた表象とみるか意見の分かれるところではあるが——）といった、「政治漫画外的情報」のうちの文字情報や、写真や図表といった画像情報などと、どのような関係にあるかを各テーマごとに考察する必要がある。そうすることによって、「新聞の盲腸」と揶揄されることを実証的に検証しなおし、「統合体」としての新聞メディアに新しい「政治漫画」の役割を見つけ出すことが可能になるであろう。

第二に、「作品」としての「政治漫画」の認識の確認がある。先のハリソンの図を持ち出すまでもなく、漫画家だけで「作品」が形成されることはまず無い。情報源、モチーフ、においても「新聞社」の意向から全く独立しているとは言いがたい。このことは、作品に多様な視点と広がりにあたえてくれる反面、外的要因（内在化している可能性もある）に規定されて「作品」自体の自立性を損なう危険があるのは、前に上げたライフらの研究（漫画家と編集者との意識の研究）に表われている（Riffe et al. 1982）。彼らの研究によれば、漫画家自身は編集者とは自立した関係であると思っている回答が多いが、編集者の回答は自立的な関係ではないとするものが多い。このような意識のズレが「政治漫画」特有のものなのか、雑誌の多コマ漫画も含めた全体的傾向なのかは即断を避けなければならない。しかし、作品それ自体を組織としての「作品」とみなし、メディア送り手研究の「意識と行動の研究」の知見を、「政治漫画」にも適用すべき時期にきていることは確かである。

ところで前述したポスト・モダンの権力に「政治漫画」はどのように対抗したらよいだろうか。政治批判としての「政治漫画」の問題は、三つに分けることができる。

まず、差異の存在だけでそれを批判の拠り所とするのではなく、差異の内実事態を問うことが必要である。差異に安住するその姿勢を検討するということは、「体制批判」のどこを行うのかを十分に検討することにつながる。これは、「笑い」をどのように峻別しその根拠は何かという問題の追及がその前提としてあると考えられる。「だれが、だれにたいして、いつ、どのように」表現しているかを問うことに鋭敏になることが求められる。

次に、「笑い」と「風刺」の問題を考えるにあたり、「政治漫画」の「解説」と「評論」の機能を検討することによつて解決の糸口が見出されるのではないかという点を指摘しておきたい。社会的現象を科学的に把握するためには、観察者として内容の理解と過程の分析を「客観的に」行うことが一般には求められるが、この観察者の位置をどのように設定するかは容易ではない。「政治漫画」の読者でありかつ観察・分析の主体であるためには、「異邦人

の眼」(佐藤、一九七三)による、対象と「同化」すれども「吸収」はされないという姿勢が必要になる。ただし、批判の対象者を「笑う」と同時に読者自身をも笑い飛ばす「笑い」の自己対象化を「笑い」に見出すことは、「笑い」がある種の目的―手段の関係に載せられることになる。すると、これによつて、情緒すら自らのものかどうかが不確かな状況を覚悟することになる。そうである以上、一度「政治漫画」の世界に埋没してそこから読み取れるものを掬い出していくほかはない。

最後に、「笑いたいときに笑いたい」という側面を「政治漫画」に残しておくためには、「政治漫画」の無定形な部分、「笑い」のユーモアとしての部分に期待せざるを得ない。攻撃性の強調が前述までの議論であつたとすれば、ユーモアの側面を強調するなら、そこに含まれる「共有」の意識を用いてそれをもとに「共存」や「共在」の政治をはかることが考えられる。価値・資源を互いの差異を認めつつ「共存」や「共在」する。そのための「共存象徴」として、「政治漫画」を位置付けることができるのではないか。

二〇〇一年十一月に開催される「日本マンガ学会第一回総会・大会」(京都精華大学)において、九つの全体会、分科会のうち「一コマ漫画」をテーマにしたものは「漫画史はなぜ必要か」という分科会だけである。こうした、漫画の中心が連載漫画、多コマ漫画にあるという状況ではあるけれども、歴史的には連載漫画の祖である、一コマ漫画において、「共存」の可能性を「笑い」と「風刺」に内在する「政治漫画」の役割を、内容と方法の再確認を通じて今こそなされるべきであることを指摘し筆を置く。

(108) 対象への隷属を「笑い」が生じさせてしまうことを示すものとして、「政治的冷笑主義」(political cynicism)をあげることができる。これは、政治情報を過度に選択的に接触・知覚・認識した結果、自分にとって好ましくない政治情報には接触せず、嘲笑し、全く「聞く耳を持たない」態度をとるものである(Cappella, et al, 1997)。「冷笑」が「笑い」に含まれるかどうかは議論のわかれるところで

はあるが、ここでは「冷笑」の攻撃性に着目し「笑い」の一形態とみなす。そのとき、「冷笑」は他の見解を持つ人々に冷淡であり、非協力的であり、「内集団」の情報のみを選択し、異質の他者への「嘲り」によって欲求が充足される。そこには「体制の安全弁」にもならない自己満足と後向きの姿勢しかない。さらに問題なのは、多数派の同調圧力によって容易に彼らへの「冷笑」を止め（もともと多数派への「冷笑」は、彼らへの依存姿勢の反映でもあるといえる）、従順な姿勢をとり、他の少数者への「冷笑」に抑圧が移譲されるおそれがあることである。「冷笑主義」はカベラによれば、マス・メディアが属性として持っており、また受け手にそれを増幅させるはたらきをメディアがしていると述べている（二〇〇一年度秋季マス・コミュニケーション学会ワークショップでの発言）。ところが「九・一一テロ事件」以降の合衆国のメディアにはそうした「冷笑主義」的態度は影をひそめたとも述べている。このような「冷笑主義」における批判の脆弱性が、政治権力主体に利用され、対象の隷属化のみならず他者の排斥につながり、「体制維持の笑い」の働きを有すると考えられる。

引用・参考文献

- 阿部潔、一九九一 「英国のカルチュラル・スタディーズにおける「批判性」再考——ポスト・モダンの批判的コミュニケーション理論か——」『新聞学評論』第四〇号 二六一頁—二七三頁。
- Adoni, H., & S. Mane, 1984, "Media and the Social Construction of Reality," *Communication Research*, 11 (3), 323-340.
- Ang, I., 1996, *Living Room War: Rethinking Media Audiences for a Postmodern World*, (Routledge)
- アルチュール・L. (西川長夫訳) 一九七五『国家とイデオロギー』(福村出版)。
- Bachrach, Peter and M. S. Baratz, 1970, Power and Poverty, (London: Oxford University Press).
- Benton, M., & P. J. Frazier, 1976, "The agenda-setting function of the mass media at three levels of information holding", *Communication Research*, 3, 261-274.
- Bennett, W. L., 1979, "Imitation ambiguity and drama in political life: Civic religion and The dilemmas of public morality," *Journal of Politics*, 41, 106-133.

- , 1992, *The governing crisis*, (New York: St. Martin Press).
- , 1993, "Constructing Publics and Their Opinions," *Political Communication*, 10, 101-120.
- フルーマー、エ（後藤将之訳）一九九一『メンボリック相互作用論——パースペクティブと方法』（勁草書房）。
- バーガー、P.、トルクマン、（山口節郎訳）一九七七『日常社会の構成——アイデンティティと社会の弁証法』（新曜社）。
- Blumer, H., "Symbolic Interaction and the Idea of Social System," *Revue Internationale de Sociologie*, 1, 3-12.
- Blumler, J. G. 1977. "The Political Effects of Mass Communication," in *Mass Communication and Society* Course Team, *The Audience*, (Open University Press). pp. 1-59.
- , 1980, "Mass communication research", in, *Media, Culture and Society*, 2(4), 367-376.
- Boorstin, D. J. 1962/1964, *The image: a guide to pseudo events in America*, (New York: Harper & Row)（星野郁美・後藤和彦訳『幻像の時代』東京創元社）。
- Breed, W., 1955, "Social Control in the Newsroom: A Functional Analysis," *Social Forces*, May, 326-335.
- Brosius, Hans-Bernd & Anke Bathelt, 1994, "The Utility of Exemplars in Persuasive Communications", *Communication Research*, 21 (1), 48-78.
- Cobb R. & C. Elder, 1972, *Participation in American politics: The dynamics of agenda Building*, (Boston: Allyn & Becon).
- , 1983, *The political uses of symbols*, (New York: Longman Inc.).
- Rrown, S. R. & J. D. Ellithorp, 1970, "Emotional experiences in political groups: The case study of the McCarthy phenomenon," *American Political Science Review*, 64, 349-366.
- Burke K., 1968, "Dramatism," in *The Encyclopedia of the Social Sciences*, pp. 445-452.
- , 1954, *A grammar of motives*, (New York: Prentice — Hall).（森繁治訳『動機と文法』晶文社 一九八二）。
- Campbell, A. et al., 1966, *Elections and the Political Order*
- Cappella, J. and Kathleen Jamieson 1997, *Spiral of Cynicism: The Press and Public Good* (New York: Oxford University Press).
- Cassirer, Ernst, 1944, *An Essay on Man: An introduction to a philosophy of human culture*, (New York: Doubleday Anchor

- Books)(宮城音弥訳 「人間」岩波書店 一九五三)。
- Cohen A. 1974, *Two dimensional man: an essay on the anthropology of power and symbolism in complex society*, (Berkeley: University of California Press). (山川偉也、辰巳浅嗣訳「二次元的人間——複合社会における権力と象徴の人類学」法律文化社 一九七六)。
- Cottle, S. 1998, 'Analysing Visuals: Still and Moving Images,' in Anders Hansen, Simon Cottle, Ralph Negrine & Chris Newbold, *Mass Communication Research Methods* (London: Macmillan Press Ltd).
- Curran, J. Gurevitch M. and Woollacott, J. 1982, 'The study of the media,' in Gurevitch, et al., (eds.), *Culture, Society and the Media*.
- , 1990, "The new revisionism in mass communication research: a reappraisal", *European Journal of Communication*, 5, 135-164.
- ダヤン、D. E. カッツ、(麻美克彦訳) 一九九六、『メディア・インメント』(青弓社)。
- Dearing J. W., & E. M. Rogers, 1996, *Agenda-setting*, (Thousand Oaks CA: Sage).
- デフレー、M. ホール・ロキーチ、S. (柳井道夫・谷藤悦史訳) 一九九四、『マス・コミュニケーションの理論』(敬文堂)。
- Douglas M. 1970, *Purity and danger: An analysis of concepts of pollution and taboo*, (England: Pelican Books), (塚本利明訳『汚穢と禁忌』思潮社 一九八五)。
- 1973, *Natural symbols*, (New York: Vintage Books), (江河徹、塚本利明、木下卓訳『象徴としての身体——コスモロジーの研究』紀伊國屋書店 一九八三)。
- Duncan, H. 1968, *Symbols in Society*, (New York: Oxford University Press), (中野秀一郎、柏岡富英訳『シンボルと社会』木鐸社 一九八〇)。
- Edelman, M. 1964, *The Symbolic Uses of Politics*, (University of Illinois Press).
- Edelman, M. 1971, *Politics as Symbolic Action*, (New York: Academic Press).
- Edelman, M. 1977, *Political Language*, (New York: Academic Press).
- Edelman, M. 1988, *Constructing the Political Spectacle*, (Chicago: The University of Chicago Press).

- Edelman, 1995, *From Art to Politics*. (Chicago: The University of Chicago Press).
- Edelman, M. 2001, *The Politics of Misinformation*. (Cambridge University Press).
- Edelstein, A.S. 1973, "An Alternative Approach to the Study of Source Effects in Mass Communication," *Studies of Broadcasting*, 9, 5-29.
- Elliott, P., 1973, "Uses and gratifications research: A critical and socio-logical alternative," in J. Blumler and E. Katz(eds.), *The Uses of Mass Communications*, (Sage) pp.249-268.
- Elliott, P., and P. Goulding, 1973, "The news media and foreign affairs," in R. Boardman and A. J. R. Groom(eds.), *The Management of Britain's External Relations*, (London: Mcmillan)
- Elliott, P., and P. Goulding, 1974, "The image of development and the development of images," in E. De Kadt and G. Williams(eds.), *Sociology and Development*, (London: Tavistock).
- 藤藤 一九九六『喜劇喜劇の起源 情動の進化論・文化論』(岩波 科学ライオンリー41)°
- Entman, R.M. 1993, a 'Framing: Toward clarification of a fractured pradigm', *Journal of Communication*, 43(4), 51-58.
- Entman, R.M. 1993b, "Freezing Out the Public : Elite and Media Framing of U.S. Anti-Nuclear Movement," *Political Communication*, 10 153-173.
- エマレーノフ N (清水博之訳) 一九八三『生の劇場』(新曜社)°
- Fejes, F. 1984, "Critical mass communication research and media effects", *Media, Culture and Society*, 6(3), 219-232.
- First, A. 1997, "Television and the Construction of Social Reality," in M. MacCombs, D. Shaw D. Weaver(eds.), *Communication and Democracy* (Lawrence Erlbaum Associates) pp.41-50.
- Fiske, S., 1990, "Cognition and Motivation," paper presented for National Science Foundation Conference Research on the American Presidency, November 12-14, Pittsburgh.
- Freedman, J. L., and D. O. Sears, 1965, "Selective Exposure," in L. Berkowitz(ed.), *Advanced In Experimental Social Psychology*, vol. 2 (Academic Press) pp.58-98.
- 藤田真文'一九八六'「カルチュラル・スタディ派におけるメディア論とネオ・マルクス主義的社会構成体論との関連性」(『新聞学評

論』第三五号)。

藤竹暁、一九六八、『現代マス・コミュニケーションの理論』(日本放送出版協会)。

ガルブレイス、(山本七平訳)一九八三、『権力の解剖』(日本経済新聞社)。

Geertz, C. 1973, *The interpretation of culture*, (New York: Basic Books).

クワン・シエネン、(秋山ゆづり、弥永信美訳)一九七五、『通過儀礼』思索社。

Ghanem, S., 1997, "Filling in the tapestry: The second level of agenda-setting," in M. McCombs, D. Shaw D. Weaver (eds.), *Communication and Democracy* (Lawrence Erlbaum Associates), pp. 3-14.

Gieber, W. 1956, "Across the Desk: A study of 16 telegaph editors," *Journalism Quarterly*, 423-432.

Goffman, E. 1956, *The presentation of self in everyday life*, (New York : Doubleday & Company Inc.), (『黒髪記』「行為と演技」誠信書房 一九七四)。

Gold D. and J.L. Simmons, 1965, "News Selection Patterns Among Iowa Dailies," *Public Opinion Quarterly*, 425-436.

Grabert, D. 1993, "Symbol and Politics," *Political Communication*, 10, 97-98.

Hall, Stuart, 1980, "Encoding/decoding," in Hall, S., et al. (eds.), *Culture, Media, Language* (London: Hutchinson),.

Hall, Stuart, 1982, "The Rediscovery of "Ideology": Return of the Repressed in Media Studies", in Gurevitch, et al., (eds.), *Culture, Society and the Media*.

Handleman, A. 1984, Political cartoonists as they saw themselves during the 1950's, "*Journalism Quarterly*, 61, 137-141.

Harrison, R. 1981, *The Cartoon: Communication to the Quick*, (London: Sage).

Hershey, M. R. 1993, "Election Research as Spectacle: The Edelman Vision and the Empirical Study," *Political Communication*, 10, 121-140.

Hirsch, P. M., 1980, "The 'scray world' of the nonviewer and other anomalies: A reanalysis of Gerbner et al.'s findings on cultivation analysis," *Communication Research*, 7 403-456.

Hirsch, P. M., 1981, "Occupational and institutional models in mass media Research: toward an integrated framework," in Nimmo, Dan, D., & Keith R. Sanders *Handbook of Political Communication* (London: Sage) pp. 13-42.

- 石田佐恵子、一九九八、『有名性という文化装置』(勁草書房)。
- 石田雄、一九六一、『現代組織論』(岩波書店)。
- 、一九八三、『近代日本の政治文化と言語象徴』(東京大学出版会)。
- 、一九八九、『日本の政治と言葉(上)(下)』(東京大学出版会)。
- 梶原景昭、一九八四、『歴史と象徴』(青木保編『現代のエスプリ別冊 現代の人類学 象徴人類学』至文堂)二八頁―四一頁。
- 亀ヶ谷雅彦、一九九四、『スキーマによる政治的認知』(栗田宣義編『政治心理学リニューアル』学文社)一五五頁―一七四頁。
- 神島二郎、一九八二、『磁場の政治学——政治を動かすもの』(岩波書店)。
- 京極純一、一九六八、『政治意識の分析』(東京大学出版会)。
- 、一九六九、『現代民主政と政治学』(岩波書店)。
- 、一九八三、『日本の政治』(東京大学出版会)。
- Lang, G., and G. E. Lang, 1953, "The unique perspective of television," *American Sociological Review* 18, 3-12.
- Langer, S. K., 1948, *Philosophy in a new key* (矢野・池上・貴志・近藤訳『シンボルの哲学』岩波書店 一九六〇)。
- ラスウェル, H. 一九六八, 『社会におけるコミュニケーションの構造と機能』(W. シュラム編 学習院大学社会学研究室訳『新版マス・コミュニケーション マス・メディアの総合的研究』東京創元社) 六六頁―八一頁。
- Leach, E., 1982, *Social Anthropology*, (New York: Oxford University Press).
- Lyman S. and M. Scott, 1975, *The drama of social reality*, (New York: Oxford University Press), (清水博之訳『ドラマティックの社会』新曜社 一九八一)。
- 前田康博、一九七八、『首のないファシズム』(『世界』九月号―第三九四号) 三五頁―三八頁。
- 丸山真男、一九四七―一九九五a, 『超国家主義の論理と心理』(『丸山真男集』第三巻 岩波書店に所収)。
- 、一九五二―一九五五b, 『政治の世界』(『丸山真男集』第五巻 岩波書店に所収)。
- McCombs M. & D. Shaw, 1972, "The agenda-setting function of mass media," *Public Opinion Quarterly*, 36, 176-187.
- McCombs, M. et al. 1991/1994, *Contemporary Public Opinion*, (Lawrence Erlbaum Associates), (大石 裕訳『ニュースメディアと世論』 関西大学出版部)。

- McCombs, M.E. & D. Shaw, 1993, "The evolution of agenda-setting research: Twenty-five Years in the marketplace of ideas," *Journal of Communication* 43(2), 58-67.
- McConahay, J.B. 1982, "Self-interest versus racial attitudes as correlates of antibusing attitudes in Louisville," *Journal of Politics*, 44, 692-720.
- McKeon, R., 1964, "Myth and arguments," in L. Bryson, R.M. MacIver and R. McKeon(eds.), *Symbols and Values: An initial study*, (New York: Cooper Square Publishers).
- McLeod J and L. Becker, 1981, "The Uses and Gratifications Approach," in D. Nimmo & K. Sanders(eds.), *Handbook of Political Communication* (London: Sage), pp. 67-99.
- McQuail, D. 1977, "The Influence and Effects of Mass Communication," in J. Curran, M. Gurevich and J. Woollacott (eds.), *Mass Communication and Society*, (Edward Arnold) pp. 70-94.
- Medhurst, M. and M. Desousa, 1981, "Political Cartoons as Rhetorical Form: A Taxonomy of Graphic Discourse," *Communication Monographs*, 48(3), 197-236.
- Mello W.B. 1998, "Quick Communications: Editorial Cartoonists in Communication Overdrive," *Communication Yearbook* 21, pp. 379-403.
- Merriam, C. 1934/1973, *Political Power: Its Composition and Incidence*, (New York: Whitty House McGraw-Hill), (斎藤眞、有賀弘訳『政治権力(上)(下)——その構造と技術』東京大学出版会)。
- 三上俊治、一九八七、「現実構成過程におけるマス・メディアの影響力——擬似環境論から培養分析へ」(東洋大学社会学部紀要第二四巻第二号)、『一三七頁——一七九頁』。
- Mikami S., T. Takeshita, M. Nakada, & M. Kawabata, 1995, "The media coverage and public awareness of environmental issues in Japan", *Gazette*, 54(3), 209-226.
- Mitchell, W. 1962, *The American Polity*, (New York: Free Press of Glencoe).
- 水野博介、一九九一、「文化指標研究と涵養効果分析——そのアイデア・発展・現状と評価」(『新聞学評論』第四〇号)二七四頁——九〇頁。

- 、一九九八、『メディア・コミュニケーションの理論』(学文社)。
- 守中高明、一九九九、『思考のフロンティア 脱構築』(岩波書店)。
- Morley, D., *The Nationwide Audience: Structure and Decoding*, (London: British Film Institute).
- Mueller, C., 1973/1988, *The politics of communication*, (New York: Oxford University). (辻村明・松村健生訳『政治と言語』 東京創元社)。
- 村松岐夫、伊藤光利、辻中豊、一九九二、『日本の政治』(有斐閣Sシリーズ)。
- 永井陽之助、一九七一『政治意識の研究』(岩波書店)。
- 夏目房之介、一九九七、『マンガはなぜ面白いのか—その表現と文法—』(NHKライブラリー)。
- Nimmo, Dan, 1974, *Popular images of politics: A taxonomy*, (Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall).
- Nimmo, Dan, D., & Keith R. Sanders 1981 *Handbook of Political Communication* (London: Sage).
- 岡義達、一九五三、『権力の循環と象徴の選択』(『国家学会雑誌』第六六巻第一・二二二頁—六二一頁—六三六頁)。
- 、一九五八、『政党と政党政治』(岡義武編『現代日本の政治過程』岩波書店) 六九頁—一〇九頁。
- 、一九七四、『政治』(『ブリタニカ国際百科事典』第一一巻平凡社)。
- 岡田直之、一九九二、『マスコミ研究の視座と課題』(東京大学出版会)。
- 大石裕、藤田真文、一九九三、『政治コミュニケーションと文化』(『マス・コミュニケーション研究』第42号) 一〇〇頁—一二六頁。
- 大石裕、一九九八、『政治コミュニケーション研究』(慶應義塾大学出版会)。
- パノフスキー、E. (浅野徹訳) 一九八七、『イコノロジー研究』(美術出版社)。
- ブルーランツァス、N. (田中正人・柳内隆訳) 一九八四、『国家・権力・社会主義』(ユニテ)。
- Riffe, Daniel, et al., 1985, 'Behind the Editorial: Cartoon' *Journalism Quarterly*, 62(2), 378-383, 450.
- , 1987, 'Deciding the limits of taste in editorial cartooning,' *Journalism Quarterly*, 64, 607-610.
- Riley, M. W. and J. W. Riley Jr., 1951, 'A Sociological Approach to Communication Research,' *Public Opinion Quarterly*, 15, 445-460.
- Rogers, E., J. W. Dearing and D. Bergman, 1993, 'The anatomy of agenda-setting research,' *Journal of Communication*, 43(2),

68-84.

Rothman, R., 1981, "Political Symbolism," in S. Long(eds.), *The Handbook of Political Behavior*, vol. 2 (Plenum Press), pp. 285-341.

坂本孝治郎、一九八六、「強行採決と議長裁定——昭和五十六年度政府予算案をめぐる——」(日本政治学会編『年報政治学1985現代日本の政治手続き』岩波書店) 四九頁—八五頁。

——、一九八七、「第一〇二回通常国会の審議日程経過——データにみる審査状況——」(学習院大学法学部研究年報『二二号』一一頁—一二六頁)

——、一九八八a、「国会における法案審査——そのデータ作成の試み——」(日本政治学会編『年報政治学1987 政治過程と議会の機能』岩波書店) 一七五頁—二〇四頁。

——、一九八八b、「第一〇四回通常国会の研究…基本データにみる審査状況」(『学習院大学法学部研究年報』二三号) 一五一頁—二三〇頁。

——、一九八八c、「象徴天皇がやって来る 戦後巡幸・国民体育大会・護国神社」(平凡社)。

——、一九八九、「象徴天皇制へのパフォーマンス 昭和期の天皇行幸の変遷」(山川出版社)。

Sapir E. 1934, "Symbolism," in E. R. A. Seligman (ed.) *Encyclopedia of the Social Sciences*, Vol. 14, (New York: Macmillan), pp. 492-465. (b).

Sapiro V., "The Political Uses of Symbolic Women: An Essay in Honor of Murray Edelman," *Political Communication*, 10, 141-154.

佐藤毅、一九七三、「同化と異化」(江藤文夫、鶴見俊輔、山本明 編『講座コミュニケーション6 コミュニケーションの典型』(研究社)、五二頁—七二頁)。

佐藤卓巳、一九九四、「現代『視覚メディア史』研究とその方法論的課題——『社会主義イコノグラフィ』論争を例に——」(東京大学社会情報研究所編『社会情報と情報環境』東京大学出版会) 四二二頁—四四二頁。

Severin, W. J. and J. W. Tankard Jr., 1979, *Communication Theories: Origins, Methods, Uses* (Hastings House).

清水幾太郎、一九五一、「社会心理学」(岩波書店)。

Shoemaker, P. and S. Rees, 1991, *Mediating the message: theories of influence on mass media content*. (Longman).

Silbermann, A. 1986, "The Way Toward Visual Culture: Comics and Comic Films," In A. Silbermann and H. D. Dyroff, (eds.), *Comics and Visual Culture*. (New York: K. G. Saur) pp. 11-27.

Smith, L. Henry, 1954, "The Rise and Fall of Political Cartoon," *Saturday Review*, May 29.

副田義也、一九八三、「マンガ文化」(紀伊國屋書店)。

Strauss, L. 1953, *Natural Right and History*. (Chicago: The University of Chicago Press).

高島通敏、一九七六、「政治学の道案内」(三一書房)。

高瀬淳一、一九八六、「現代政治学の発展における政治的象徴理論の存在と意義(1)——メリアムの政治理論における文化人類学的視座」(『早稲田政治公法研究』第二〇号) 一頁—三三頁。

——、一九八七、「現代政治学の発展における政治的象徴理論の存在と意義(2)——政治的象徴の分析から政治の象徴理論的分析へ」(『早稲田政治公法研究』第三二号) 一頁—三四頁。

竹下俊郎、一九八一、「マス・メディアの議題設定機能——研究の現状と課題」(『新聞学評論』第三〇号) 二〇三頁—二二八頁。

——、一九八四、「議題設定機能の視角——マスコミ効果研究における理論と実証」(放送学研究第三四号) 八一頁—一一六頁。

——、一九九〇、「マス・メディアと世論」(『レヴァイアサン』第七号) 七五頁—九六頁。

——、一九九八 a、「メディアの議題設定機能」(学文社)。

——、一九九八 b、「メディア効果理論に関する一考察——議題設定、プライミング、フレーミング」(日本選挙学会一九九八年度大会論文)。

竹内郁郎、一九九〇、「マス・コミュニケーションの社会理論」(東京大学出版会)。

田中善一郎、一九七三、「保守政治の支配過程(一)」(『国家学会雑誌』第八六巻第一一・一二号) 一頁—二九頁。

——、一九七四 a、「保守政治の支配過程(二)」(『国家学会雑誌』第八七巻第一一・一二号) 六三頁—九四頁。

——、一九七四 b、「保守政治の支配過程(三)」(『国家学会雑誌』第八七巻第七・八号) 一頁—三三頁。

——、一九七七、「保守政治の支配過程(四・完)」(『国家学会雑誌』第九〇巻第三・四号) 七五頁—一八五頁。

- 「一九八一」「自民党体制の政治指導」(第一法規)。
- 「一九八六」「自民党のドラマツルギー」(東京大学出版会)
- Tuchman G. 1978/1991, *Making News*, (The Free Press). (鶴木真 校内篤子訳 『ニュース社会学』 三嶺書房)。
- Turk, J. V., 1986, "Public relations' influence on the news," *Newspaper Research Journal*, 7, 15-27.
- Turner, V. 1974, *Dramas, fields, and metaphors: Symbolic action in human society*, (Ithaca: Cornell University Press). (梶原景昭訳『象徴と社会』 紀伊國屋書店 一九八一)
- Verba, S. & L. Pye, 1965, *Political Culture and Political Development*, (Princeton University Press).
- 渡辺守雄「一九九三」「現代アメリカ政治学の一潮流——M・エーデルマンの象徴政治批判学を中心として」(『思想』八二四号) 一一九頁—一二七頁。
- Weaver, D. et al., 1981/1988, *Media Agenda-Setting in a Presidential Election: Issues, images, and interest*, (Praeger). (竹下俊郎訳『マスコミが世論を決める——大統領選挙とメディアの議題設定機能』 勁草書房)。
- Weiss, W., "Effects of the Mass Media of Communication," in G. Lindzey and E. Aronson (eds.) *The Handbook of Social Psychology*, vol. 5, (Addison-Wesley), 159-160.
- Weissberg, R. 1975, "Political efficacy and political illusion," *Journal of Politics* 37, 369-384.
- White, D. 1950, "The 'Gate Keeper': A Case Study in the Selection of News," *Journalism Quarterly*, 383-390.
- Whitney, C. & L. Becker, 1982, "Keeping the gate," for agenda-setting research, *Journalism Quarterly*, 69, 813-824.
- 山口勲「一九八四」「最近の説得コミュニケーション研究——送り手の信憑性の要因を中心として」(水原泰介、辻村明編『コミュニケーションの社会心理学』東京大学出版会 一九九一—四二頁)。
- 山川雄己「一九八二」「政治学とサイバネティクス」(日本政治学会編『年報政治学1980 政治学と隣接諸科学の間——その交渉と課題——』岩波書店 七七頁—一〇九頁)。
- 安川一「一九九四」「マンガの語られ方——『ヴィジュアル』をめぐる困惑」(林進編『メディア社会の現在』学文社) 九三頁—一〇九頁。
- 四方田犬彦「一九九四」「漫画原論」(筑摩書房)。

吉見俊哉、一九九二、「博覧会の政治学」（中公新書）。

——、一九九四、「情報化社会の儀礼秩序——メディア・イベント研究序説——」（東京大学社会情報研究所編『社会情報と情報環境』東京大学出版会）四四二頁—四七〇頁。

——、一九九八、「カルチュラル・スタディーズのメディア・コミュニケーション研究」（竹内郁郎、児島和人、橋元良明編『メディア・コミュニケーション論』北樹出版）一七六頁—一九四頁。

本研究にあたり、北陸大学から二〇〇〇（平成一二）年度北陸大学特別研究助成を受けた。